

百田夏菜子とラジオドラマのせかい

第四十一話「母の秘密」

出演 妹 …… 百田夏菜子

兄 …… あなた

作 …… 清水サトル

演出 …… 小鍛冶優子

兄 「（*呼びかけ）あのさ」

妹 「うん？」

兄 「玄関の傘立てだけど」

妹 「傘立て？」

兄 「見慣れない男物の傘があるんだけど。夏菜子の？」

妹 「男物？ 違う」

兄 「（*ひとりごと）オレのじゃないってことは、母さんか？」

妹（ナレ）

そう言われて見てみると、玄関に置かれた傘立てに…

見慣れない「男物の紺色の傘」が、ささっていた。

家（うち）は、両親が子供の頃に離婚したので、

男性物の傘を使う人はいない。

妹 「だったら、お母さんしかあり得なくない？」

兄 「そうだよな」

妹 「お母さんが誰かに借りたんじゃないの？」

兄 「誰に？」

妹 「会社の誰かとか(?)」

兄 「でもさ。夏菜子は会社で誰かに傘なんて借りたりする？」

妹 「借りないか」

兄 「オレは人からなんて借りたことない。そんな借りないだろ」

妹 「確かに。そんなないね」

兄 「と、なると。(*間があつて) まさか……」

妹 「え？」

(*ミステリー風の B G が忍びこむ)

兄 「母さんに： 男の人が：」

妹 「できたっていうの？」

兄 「ないとは言えない」

妹 「ないでしょ」

兄 「どうして言い切れる？」

妹 「それは……。でも、例えばさ。そういう人がいたとして。

その人の傘がなんでウチにあるの？」

兄 「母さんのパートって早番だと3時には終わるよな」

妹 「うん」

兄 「オレたちが帰って来るまでの間に、

ウチでお茶でも なんてこと あるかもじゃん」

妹 「なるほど」

兄 「たとえばさ、ウチに来た時には雨が降っていたけど、

帰る時にはその雨も上がって…」

妹 「傘を忘れて帰った」

兄 「そう」

妹 「でもあの傘、いつからあそこにあるんだろ」

兄 「気づいたのは今日だけど」

妹 「待って。おとといの朝はなかった。

私が家出るとき、玄関出たらポツポツ雨が降ってきたから

傘を取りに戻って、その時、傘立てから自分の傘を探したけど」

兄 「その時にはなかった？」

妹 「なかった」

兄 「(*思い出す) あ」

妹 「なに？」

兄 「おとといだよね？ あの日って、確か朝から雨が降り出して

その後 午後4時には止んで太陽が出てた。

本社から神田の営業所に行ったのがその時間だったから良く覚えてる」

妹 「てことは。むしろ、おととい午後からの線が濃厚？」

兄 「普段、玄関の傘立て使わないから気づかなかった」

百田夏菜子のラジオドラマのサカイ
Hanako Momota and the world of radio drama

感謝祭 #百せか祭

妹 「私も。いつもは折り畳み傘だから」

兄 「どうする？」

妹 「どうするって？」

兄 「もし、再婚って話になったらどうする？」

妹 「私は、お母さんが良いならそれで良いけど」

兄 「オレはちょっと」

妹 「え？ 反対なの？」

兄 「反対っていうか。もうこれ以上、苦勞して欲しくないから。」

冷静に相手をよく知って、見極めてからじゃないと」

妹 「すぐに賛成はできないってことか」

兄 「そうだね」

妹 「そっか」

兄 「たぶん最後は 母さんに賛成する事になると思うけど」

妹 「そうになったら、ここで同居になるのかな？」

兄 「母さん。おばあちゃんの家も近いし」

ここは離れたくないって いつも言ってるからね」

妹 「なんか、これからイロイロありそうだね。」

ねえ。ちょっと傘、広げてみようか？」

兄 「え？ 広げてどうすんだよ」

妹 「相手がどんな人なのか、手がかりがあるかも知れない。私ちよつと見てくる」

SE

(*ドアの開く音/ドア)

兄 「(*玄関に向かって) おい、手がかりってどんな手がかりだよ!

小学生じゃないんだから、名前なんて書かないだろ」

妹 「(*玄関から聞こえる) あっ!」

(*ミステリー風の BG が消えて)

SE

(*玄関に駆けつける音/ドタドタ)

兄 「どうした? (*気づいて) あ。傘になんか書いてある」

妹 「(*読む) 長谷川総合電気設備 総務所有」

兄 「それって… 確か。お母さんのパート先。てことは」

妹 「会社の傘じゃん!」

SE

(*ハッピーチャイム)

END